

「マラソン・マン」

著者: ウィリアム・ゴールドマン

翻訳: 沢川進

ハヤカワ文庫(544円, 1983年)

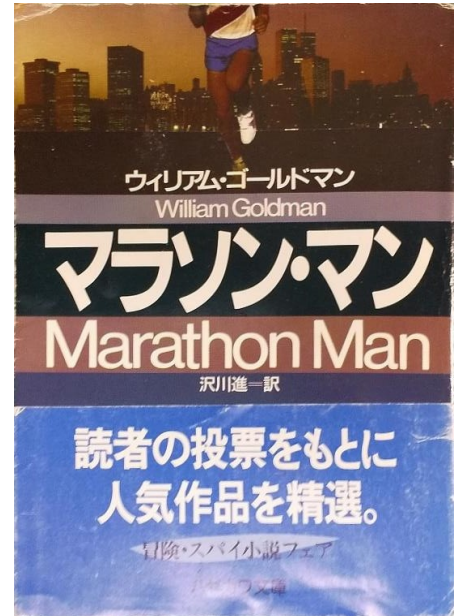
紹介者: 榎本博康

[紹介]

リーヴィは名門コロンビア大学で博士号を目指しており、同時に偉大なマラソン・ランナーになることを夢見ている。彼の父は昔、アカ狩りで追いつめられて自殺した。しかし両親のいない彼には、石油関連の仕事で裕福な実業家である、大好きな十歳上の兄がいた。そして彼にもオルガという恋人ができる。

しかし彼の生活は、あるナチの残党の大物の父親が交通事故死することで崩れてしまう。今まで危ういバランスを保ってきた平穏な生活が、たった一本のピンを抜いただけで、ガラガラと崩れてしまったのだ。

実は彼の兄は実業家ではなく、「デビジョン」と呼ばれる闇組織の一員であった。ナチの残党達は兄を殺害し、兄が残したであろう機密をリーヴィから取り戻すべく、彼をとらえて拷問するが、彼はアベベのように裸足で逃げ、さらに反撃に出る。



[感想]

既に同じ題名のマンガを紹介したが、今度は小説だ。マンガは暗かったが、この小説は重たい。どうしてマラソンというと、こうなるのだ。

背景がナチの残党狩りであり、またアカ狩りだからだろうか。でもこれらは娯楽小説では重要な手法である、説明不要の便利な悪や、便利な不幸で状況を設定したにすぎない。この小説の重いテーマはリーヴィの人格崩壊である。よくある娯楽小説は、主人公の成長を共に楽しむことにある。しかしこの話は違う。全く違うのだ。

リーヴィは幸せな青年として登場する。博士号を持ったマラソンチャンピオンを夢見て。少し内気なだけで頭は良さそうだから、博士にはなれそうだが、マラソンは通学ランをしている程度なので、実力は不明だ。いつも走っているのに、近所の不良達からは変人とからかわれている。

彼は授業料の安い、田舎の州立大学に入り、そこで開校以来初のローズ奨学金を得て、オックスフォードで学士号を取り、今はコロンビア大学で博士になろうとしている。正にアメリカンドリームだ。

でも、石油関係の実業家と信じていた彼の兄は、実は闇の組織の人間で、殺しのプロであり、そしてナチの残党達に刺殺される。すぐには死なず、リーヴィのアパートに辿りついて、彼の腕の中で。

兄が重要なものをリーヴィに託したと考えた彼らは、リーヴィをだまして捕らえ、拷問にかける。兄の死後二十四時間以内に次々と起こる事件の中で、彼にはいろいろなことが見えてくる。彼は人間が見えてしまうようになる。だまされなくなる。そしてナチの残党の手下の四人を殺すが、それには恋人のオルガも含まれている。最後にセントラルパークで親玉を殺す。父が自殺した形見の銃で。

銃声に気づき駆けつけた警察官は、近くで遊んでいる子供に様子を聞く。しかし気が付く。それは子供ではなく、二十歳台の青年リーヴィだ。彼は事件の中で全ての大切なものを失い、自分が自分であることの存在証明を喪失し、自分自身を消去してしまっ、子供のように見えたのだ。彼は再び自

己を再形成できるのだろうか。残酷な結末だ。

さて彼はヌルミやアベベに啓示を得て、彼らを目指しているが、まだ25キロ位迄しか走ったことがないらしい。また走って逃亡する場面があるが、たいした山場ではなく、また作者はランニングの描写が得意ではない。マラソンの重要性がさほどではないストーリーなのに、どうしてマラソン・マンなのだろうか。

私はこう考えた。リーヴィにとって博士号もマラソンも夢の実現の途中であった。しかし彼は兄も恋人も失い、殺人者となった。法的には正当防衛かもしれないが、心の傷は深い。傷は深く、大学に戻れるかも分からない。彼はもう、かつての彼ではなくなってしまったのだ。でもすべてを失っても、走ることは彼の最後に残された属性だ。心の中のヌルミやアベベと共走しつつ、いつかは再生できると信じたい。

ここまで書いた所で、皇居の周回でフルマラソンを走ってきた。そして二重橋前広場で思った。日本人はあの1945年8月15日に、国民的アイデンティティを失った。しかし人々は真面目に労働し、豊かな国を再建した。今また金融機関の危機に代表される社会構造の変革に直面している。でもきっと大丈夫だよ。地に足をつけて粘り強くやろうよ。リーヴィ、君も大丈夫だよ。君はマラソン・マンだから、ね。

(初稿1999. 1. 20)

[リバイバル感想]

奇しくも今日は8月15日である。新聞には、淡々とこの日を受け入れた人々が多かったのではないかとのコラムがあった。太平洋戦争だけをとりえても3年8か月、満州事変からで足掛け15年、国民は疲れ果てていた。

一方現在は新型コロナ禍での自粛が続いている。ワクチンができたとしても、かつての日常が完全に戻るかは分からない。このような事態になるとは、今年の正月には思いもよらなかった。コロナ禍に玉音放送は無い。

さて、この原作の著作権表示が1974年、東西冷戦の時代ではあるが、ナチス残党もまだリアリティのあった時代であった。映画「明日に向かって撃て」の脚本家が、本作品では何を伝えたかったのだろうか。私の勝手な理解では、無知というのはどういうことかである。リーヴィがのんきに暮らしている裏で、兄や恋人を始め、彼が知りようもない陰謀が世界の裏で動いている。実はこれは小説の中での特殊な設定でのモノガタリでは無く、我々の住む社会での普遍的な構造であるかもしれないとの指摘ではないか。そんなことは常識だろうと思うあなた、身の安全に気をつけて下さい。

それにしても原題も「Marathon Man」、一体何を象徴したいのだろうか、ここは依然としてナゾだ。

(2020. 8. 15)